

海 (かいし) 市

No. 17

● 詩

- 02 前田 勉 午 睡
04 前田 勉 自 我
06 横山 仁 生活の柄 12

● エッセイ

- 10 細部俊作 二つの山小屋で (2)
~蓼科山、車山山行~
14 佐藤ただし 水田とツバメ (15)
17 横山 仁 雑記 (17)

午睡

前田 勉

夏の光にようやく慣れた眼が
神社の木陰を過ぎたあたりから
前を行く影に気づいた

ほら

逡巡してばかりいる

私の顔に似た

私が

向こうから引き返してくる

自我へへへ

前田勉

現在いまいる位置から遠く
街並みを通る風とともに
無窮との空へ翔とんだ

少しばかり
渦巻く迷いがあつたと記憶された
少年の
記念日

生活の柄 12

横山 仁

—ところづくの青なばらにもキツネダマ海市てふくに詞にいひか
はれど、みな世に言ふ蜃気たつてふ事にこそあらめ〔ひ
おのむらぎみ〕

菅江真澄が遠方からぶらりとやってきたのは夏の暑い日
だった。

《秋田市に戻り、秋田県現代詩人協会総会で講演。題は「詩
の今」。会場は栄太楼といって古い落ち着いた旅館。(引用
者注、平成七年五月二十八日。会報では「現代詩の今」(中

略) そのあと懇親会。終わって連れ立ってぶらぶら歩いて秋田駅構内の酒処へ。そこから秋田ビューホテルの喫茶室で斉藤勇一さん米屋猛さんらと歓談。さらに斉藤さんと駅前酒処へ。》

とかくのは、「ホヤを好む」神戸の詩人・安水稔和氏『菅江真澄と旅する―東北遊覧紀行』(平凡社新書、二〇一七)。このとき酔っ払っただれかが講師にからんだというウワサも……。

「#菅江真澄」というツイッターでみたのは、「梅の花湯の記」にあるという古四王神社向かいの「藤茶屋跡」の藤(shinu @僕の歩く町)。二〇一四年六月の「詩の小径」のときはわからなかった。高清水や墓碑はみたが。

四十年ほどまえ一度泊めてもらったことのある秋田書房の簾内敬司氏が亡くなったらしいときいたのは、秋田県現代詩人協会総会のあとの懇親会の時だったか。『菅江真澄みちのく漂流』(岩波書店、二〇〇一)を入手したのは、

それからだ**いぶ**あとのこと。なかで宮沢賢治の「北ニケンクワヤソシヨウガアレバ」と小繋事件の關係にふれていた。

安水稔和氏は「第八章 津軽半島一周〈中〉」では高木恭造の詩「夜明け」を引用している。《立タツ小シヨ便ベの音オドア母オガ親ダだベネ／／濃霧ガスの中ナガから父親オドア／鱗ウロコだらけネなてもどて来たネ／／大漁ダドだド！》

いま

道端の生け垣で立ちシオンベンしていたか**つち**やたち

の音は きこえない

滑走路の下に埋もれた硫黄島の**と**つちやたち

の毀れていく音も きこえない

不漁の記憶のしづきの音符

が 沖で

デルタブルース*をうたっている

*成田豊人詩「令和ブルース」(「komayumi」40号)を
かりる。とりあえず、最終連は次のとおり。

人々の生活に幻想が織り込まれ／時の流れまで加工
を加えられ／再び区切りまで施された／祝祭は懲り
ずに繰り返され／気が付くと人々の記憶は／まこと
しやかに分類されるだろう／その時 どこからか／
古く微臭い旋律が聞こえて来る

二つの山小屋で (二)

蓼科山、車山山行

細部 俊作

□クヌルプヒュッテで

霧ヶ峰のビーナスラインを行くと、沢渡にクヌルプヒュッテへの進入路があった。カーナビにしたがつて道なりにゆつくり行くうちに、なんと霧ヶ峰の草原の中に出てしまい、散策中の人たちと遭遇してお互いにびつくりした。こんな自然のただ中に車を乗り入れるとは何事かと、これはちよつと響蹙を買ったかもしれない。こちだつてそのつもりは毛頭なかつたのに、いやはや何ともバツの悪いことだつた。そそくさとUターンして引き返すうちに案内板を見つけた。ここをY字路と気づかずまっすぐ進んでしまったのだった。示された方へ進むとあか抜けたロツジ風の一軒家

があつた。前庭に車の姿がなければ童話に出てきそうな林の中の木舎という感じだ。こげ茶色の外壁に白でサイドラインが引かれ窓枠にも白の縁取りが施されている。

車から出た私を、庭の囲いから出て名を問いかけてくれたのがこのご主人だつた。八〇歳代だろうか。狭い玄関を案内されて中に入ると、一階はダイニングなど人の集まる所、二階は客室になっている。一階の談話スペースと食堂は一体となっているが談話スペースの方が一段下がつて中央にストーブとテーブルがある。食堂の奥は厨房だ。窓の近くには昔ながらのランプが六個吊るされ、昔の分厚いスキー板も掛けられ、ストックも大きく存在感があつた。食卓にストックの先端から外した竹製の輪っかが置かれていた。その輪には皮のベルトが付いたままで、鍋敷きに使つていたのである。これは洒落ている。

一九五七年に建てられたというだけあつて、壁とか階段やテーブルの木も調度の金具も磨かれた光沢に歴史が感じられる。私の部屋は二階の奥まったところで、小さな窓が二か所にあつた。その窓からは木立が



繁っているだけでその先は見通せないが、霧ヶ峰の草原が広がっているのだろうか。天井から下がっている照明は傘のついた電灯で、手でスイッチをひねって点ける昭和の頃のもので懐かしい。他の客がまだ霧ヶ峰散策から戻ってこないうちにと風呂に入った。小さな浴室は壁が木だが浴槽はタイル張りだった。こんなふうに何かと珍しい気に思いつかれるのも、このヒュッテの造りが昭和のハイカラさを維持していて、しかも清潔感もあって好感が持てたからだと思う。

談話スペースに置かれた書架に並んでいるのはご主人の蔵書のような。串田孫一のほかヘルマン・ヘッセの全集もあった。そこにヒュッテの名前と同名の本を見つけた。ページをめくるとそれが小説の主人公の名前であることが分かった。霧ヶ峰に宿をとるならこの春に故人となった手塚宗求さんが開いたコロポックルヒュッテだと決めていた。ところが、予約の電話で満室だといわれ、諦めてここにしたのだったが、なかなか隠れ家的でいい雰囲気醸している。

食事もとてもよかった。厚めのハンバーグが印象に残った。奥さんや息子さんが腕を振るっただろう。

朝食はパンにシチューがつき、手製のジャムもヨーグルトも美味しかった。

私のついた食卓には埼玉から来たという四大家族と名古屋からの夫婦連れが座った。後ろの談話コーナーのテーブルには三大家族が座っていた。私が秋田から来たというと、皆にびっくりされた。そんな遠くからよくここまでという驚きだったようだ。自分としては秋田からだって東北からだって霧ヶ峰に来ますよ、といいたいところだが、埼玉や名古屋の人が信州に来れば秋田はまさに遠い地なのだろうか。そう思いながら話しているうち、今度はこちらが驚いた。埼玉の四大家族の一人（奥さん）が秋田市の飯島出身だというから、なあんだ、秋田の人もいるんじゃないのという顔で笑って見せた。旦那さんは一〇歳の頃に絵を描く母親と一緒に来てから何度も泊まりに来ているというし、名古屋のご夫婦も八度目の投宿だというから、常連さんたちだった。おそらく何度投宿しても、このヒュッテのもてなしが彼らを失望させることがなかったのだと思われた。

ゆつくり松本へ下っていった。

山日記（二〇一三年一〇月）から

隠れ家に朝が来た。デッキのある庭先にも日が当たり好天を期待させた。車山へ向かう私をご主人が見送ってくれた。昨日、ヒュッテに向かう途中に通りがかった時の霧ヶ峰・車山高原スキー場は多くの観光客で賑わっていたが、今朝はまだ早いせいかな、車はまばらだ。売店の裏手に登山口があり、そこからゆつくり登った。♪風にふるえる緑の草原、と加山雄三が昔うたった歌は、若き旅人よくと続くんだったな。ちとちとら年食った旅人だよと一人笑い。草原を右に眺めながら一時間半かけて山頂に到着。ただ、ガスが濃くなり、三六〇度の眺めは得られなかった。風も強く寒かったので、下りはリフトを使って車に戻った。今度は霧ヶ峰にさまよいに来てみたいと思った。

今朝ヒュッテを出るときに、帰りは茅野には戻らず松本の方に下るといいとご主人からいわれた。そういえば、あのクヌルプは冬期間は休業するのだという。冬支度をしてから自宅のある松本へ帰る、その道がこれなのだった。途中うまい蕎麦屋があるから寄ってみたいともいわれたので、その勧めに従ってアザレアラインのカーブをこなしながら蕎麦屋を探しつつ、

水田とツバメ（一五）

佐藤 ただし

幼鳥が気に入った場所

八月一九日の夜半から久しぶりに雨が降り、普段は開けておく二階の窓を閉めて寝た。朝になり目が覚めるとその雨も止み、雫がポツツ、ポツツと一階のテラスの屋根に落ちる音が聞こえてきた。

起き上がってカーテンを開けると、目線より少し高いベランダの物干し竿に、ちよこんとツバメが一羽止まっていた。それもすぐ目の前だった。薄つすらと明るい空を背景に、部屋の中を覗いているように見えた。

雨を逃れてずつとそこにいたのか、知らずにカーテンを開けたのに驚いて飛び立ちもせず、こちらを見ている。窓に取り付けてある網戸が、ブラインドの役目

をしたのかも知れない。外の薄明かりのせいで、ツバメの姿はモノクロ写真のようにしか見えないが、閉じた両方の翼の下から羽毛が外にはみ出していて、尾羽根もまだ幾分短かく、幼鳥のようだ。物干し竿に止まっている細い脚も、左右の開き具合が微妙に違い、ちよつと不格好な感じだ。そして絶えず顔を左右に動かし、辺りを見ている。幼鳥との距離は窓を挟んで約三メートル。この世に生まれてまだ二、三か月で、好奇心いっぱいの子がすぐそこにいる。

この幼鳥は時々翼を交互に伸ばしてストレッチをしたり、向きを変え、こつちに背を向けて私と同じように隣家の庭や電線に止まっているカラスなど、外の景色を見ているように見える。

この鳥を見ていると、六月にここに来ていたツバメの幼鳥のように思える。確認すると、六月一四日から二七日までの十三日間、朝四時半頃になるとここにやって来て、五分くらいして飛び立つことが多かった。最初は一羽で来ていたが、親鳥もそばに止まっていることもあった。止まる場所も大体同じで日中も来るようになり、洗濯物が干せないため、ホームセンターで

同じようなパイプを購入し、ベランダいっぱいには竿を伸ばし、ツバメが止まる場所から離れたところに洗濯物を干すようにした。

ツバメが来ていた約二週間は、目覚めるとまず湯を沸かし、ツバメが見える位置に腰掛けてお茶を飲み、ツバメと一緒に外を眺めていた。こうした小さな生き物と時間を共有できるといふのは、悪くないと思つた。

このツバメはこの辺の田畑や民家の周辺を自由に飛び回つてエサを食べているのは知つていたが、夜間はどこに行つてゐるのか。たまたま見た野鳥の雑誌にツバメの罫ねぐさを観察しに行くという企画があり、河川敷の葦や萱のあるところが観察場所になつてゐた。そういえばこの近くの河川敷も萱が一面に生えてゐるので罫になる思い、日が沈んでから、自転車に乗つて見に行つたことがあつた。

家から一キロほど離れた堤防に上がると、一三三百メートル離れた雄物川との間に、萱や背の高い草木が青々と生い茂つていて、川は所々しか見えなくなつてゐた。川向うの堤防に沿つて四ツ小屋の町の住宅が見え、その向こうに丘陵があり、左後方に太平山の山脈

が黒っぽいシルエットを描いてゐた。

日が暮れると共に、思い思いに田んぼを飛び回つてゐたツバメは、ここで合流し、飛びながら群れを作り、適当な場所を見つけて萱の穂先に点々と止まつてゐた。背丈が三メートルにもなる萱の先端に止まつてゐれば、地上の動物たちに襲われる心配もなく、群れでいれば、カラスやワシタカ類に襲われるリスクも軽減できる。小鳥たちにとっては格好の罫になるだろう。

ツバメの他にもスズメやカワラヒワなどいても、真直ぐに伸びた堤防の上に作られた管理道路の上に降りていたり、群れて飛び回つてゐた。こうした場所で、鳥たちはそれぞれのパートナーを見つけることも出来るのだろう。

今は使つていないが私が通つてゐた頃の中学校の野球練習場がこの河川敷の中にあり、バックネットを張つたポールにヒヨドリが一羽止まつて鳴いてゐた。日は大分暮れて来てゐた。ウグイスの鳴き声も聞こえ、多くの野鳥がここに集まつて、夜を過ごしてゆくのが分かつた。

ベランダの幼鳥は一時間ほど休んでいたが、近くを

飛んできたツバメに合図をしたのか、ツイッ、ツイッ
と二回鳴いて、飛び立って行った。ツバメの幼鳥はそ
の後三日間、ほぼ同じ時間にやって来て、ほぼ同じ場
所に止まっていた。鳥にもそれぞれお気に入りの場所
というのがあるのかなと思った。

雑記 (17)

横山 仁

けて——私的詩論集』(2016年、土曜美術社出版販売)のなかで、丸地守氏の言葉、「詩人は、時代の状況、その変化と向き合い、その深い関心の中で、孤立を恐れず、自己の詩魂を解放しなければならぬ」を紹介していた。

ここで、たとえば詩人を歌人にかえても通用するのだろうか。

*

平成から令和になって、魁では「時代を詠む——平成から令和へ」と題して、「さきがけ読者文芸(短歌と俳句)の選者8人に、平成の歩みと、令和への思いを詠んでもらいました」とある。営利企業がなにをやるうと自由だが、詩がないのがミソか。詩壇の選者には、頼まなかつたのか、断られたのかわからないが、こういうときに、思い出すのが、秋山清の「詩は否定し歌は肯定する」である。「少しばかり変わったことが起こると詩人たちですらよろこびたがる。同調したがる。これがうたの精神である。」(秋山清著『詩入門』1971年、三一新書)

似たようなことを、高橋玖未子氏が、『詩を問いつ

今年は、天安門事件から30年ということで、いろいろな動きがあるようだ。YouTubeでは、集会(「六四天安門事件30周年記念集会)の様子をみることできるが(録画は不可)、25年の時もおこなわれているようだ。「雑記(15)」で、町田智宏氏の天安門広場内では虐殺はなかったを引用したが、そのなかでもふれられているNHKについては、「天安門事件での虐殺は無かった、NHKクローズアップ現代の捏造」という映像がYouTubeに挙げられているし、また、板東忠信氏が「虎ノ門ニュース」で紹介した文書は、板

東氏のブログ（「板東学校」）でみる事ができる。記事がでて、この資料を持ち出した「作者：总参军官」という人は、その後行方知れずといわれている。

<http://jasmineplaces.blogspot.jp/2014/06/8961-10.html>
被害者総数、なんと約3万2000人とのこと。

（引用終わり）

（引用開始）

89年6月1-10日北京军队镇压处决人员统计 - 三万二千人

作者：总参军官

弓月恵太さんがよくいう、江沢民上海閥だが、0616のツイッターより。

（引用開始）

以下の数字出于中共内部，时间为2004年1月11日，其本人已于2004年11月21日在北京被杀。其姓名不详，只知道是总参的高级官员。

（以下、板東忠信氏の訳）

中国共産党解放軍の情報工作を担当している総参謀部から、天安門事件当時のある程度正確な被害者数が暴露されておりませう。

【89年6月1-10日北京決人 - 三万二千人】

（訳：89年6月1-10日北京軍隊が鎮圧処刑した人員統計・3万2千人）

（引用終わり）

そして、6月11日の「新唐人NTDTV」（ニューヨークに本部を置く中国語衛星放送）によれば、「中国人

実業家が江沢民一家の隠し財産を暴露」とあり、海外
合わせるとその資産額は数百兆とのこと。

また、「中国の真実をお教えします ◆マスコミが
報じない中国の真実◆」では、

(引用開始)

江沢民の息子、江綿恒（こう・めんこう）は父親の勢
力を利用して中国共産党の政治、経済、軍部方面を掌
握し、名実ともに「官民一体」のトップとして、驚く
べき「汚職王国」を打ち立て、「中国汚職ナンバー1」
との異名をとって周正毅（しゅう・せいぎ）事件や劉
金宝（りゅう きんほう）事件など、多くの国際的な
汚職事件に関わっています。

(引用終わり)

金額ではどういとおよばないとしても、日本でも、
長年独裁をふるったのだから中国共産党の不破哲三元
中央委員会議長の1000坪の豪邸が取り沙汰されてい
る。権力は腐敗する、ということだろう。

*

先号で松永伍一著『日本農民詩史』にふれたが、ヌ
ペーヌの関係で発行年を入れることができなかった。
1969年2月の初版で、1970年には第2刷となつて
いる。

秋田県関係を追加すると、中巻（二）では、
「秋田の稲村容作、秋田芝夫、北本哲三、越後谷隆治（中
略）らの仕事は見落すべきではない。」

「秋田には『処女地帯』の仕事が九年（一九三六）か
らはじまるが、この第一次は当然戦後の第二次の活潑
な仕事へと直接受けつがれているので、下巻でまとめ
て相当のスペースをとって論じていきたい。

秋田にはリベラルな立場からうたった堀井梁歩があ
り、『種蒔く人』から『文芸戦線』へとつづき、労農
派につながる岩淵威夫、越後谷隆治が、先輩金子洋文
らの動きと呼応して積極的な姿勢をとってきた事実が
あり、アヴァンギャルド的観点をもって出発し、ダダ
的傾向をあらさまに示した『悍馬』の三輪猛雄と小
笠原雄二郎が雄勝郡にいたが、地元での詩運動の形は

とっていない。おそらく秋田出身者ではないかとおも
うが、泉芳朗や鮫島慶江や浅井十三郎らの『詩生活』
につながりをもった海野秋芳が『北の部落』という詩
集を十六年（一九四一）五月に鸚鵡社から刊行してい
る。」

と紹介されている。

また、岩手県の方に入っているが、

「その鈴木伸治はすぐれた素質をもちながら若くして
未完成のまま死んだ不運な詩人であった。（中略）

かれは大正元年（一九一三）国鉄職員の父の長男とし
て秋田市東土手亀の町に生まれた。本名を稲夫といひ、
大正八年（一九一九）秋田市で小学校に入學、三年生
のとき岩手県東磐井郡黄海村に移り（以下略）」。

そして死後、友人らの手によって鈴木伸治遺稿集『黄
海村』が十七年（一九四二）四月、三芸書房から刊行
された。

なお、岩渕威夫の出身地は、不明だが、越後谷隆治は、
昭和十二年（一九三七）一月二十五日、「前年1月29
歳で夭折した詩人越後谷隆治の遺稿集『風の音』が土
崎商業時代の恩師近江谷友治（土崎版『種蒔く人』同

人）の手で刊行される。」（伊多波英夫編著『秋田現代
文芸年誌』2003、秋田ほんこの会）

秋田芝夫は、「農民」という雑誌で活躍したようだ。
（後日、岩渕威夫について秋田県立図書館に調べても
らったところ、『大曲市史』に名前が出てくるとのとこ
とだったので、仙北出身か？）

*

かつて『ホロコースト産業—同胞の苦しみを「売り
物」にするユダヤ人エリートたち』という本も出され
ているが、「放知技」で「たかひろさん」が書いている。
2019/03/20 (Wed)

(引用開始)

南京大虐殺、従軍慰安婦問題も嘘ばかりでしょ！

これは私も認めます。大学時代に経営学を教えていた
現役で三菱系の経営コンサルタントで働いていた先生
がアウシュビッツ記念館に行ったそう。ここで何
十万、何百万のユダヤ人をガス室で殺される訳ないや

んとぶちギシ。頭使え、洗脳されるなって教えてくれ
ました(笑)
(引用終わり)

*

アイヌは先住民族というウソ。そもそも、アイヌと
はなにか、が定義されていないまま、フェイクが利権
化されているとのこと。YouTubeの「こちらチャン
ネル北海道」で、「アイヌ新法の黒幕、鈴木宗男氏の
主張をぶった切る」(31.2.11)、「アイヌが北海道の先
住民族ではないことを学びましょう」(31.4.15)、「今
年も健在、アイヌ利権」(R 1. 5. 27)などをみる
ことができるし、「アイヌ民族党の問題点とその実態」
(砂沢陣氏と河野本道氏の対談、2011.11.23)なども
ある。また、砂沢氏は、「後進民族アイヌ」というブ
ログ (<http://koushinminzoku.blog11.fc2.com/>) で
は、「現代アイヌの差別撤廃運動「北海道アイヌ協会」
と利権に群がるアイヌ団体と部落団体・在日団体との
癒着に強く異議を唱える。税金搾取の為に「アイヌ差

別を再生産し』『歴史を歪曲させる』現代アイヌの運
動の実態。このままでいいのですか?』とあり、問題
化している。一部を紹介する。(2019-03-29)

(引用開始)

今回の知事選挙は● [原文は●が赤字になっている]
んこ味のカレーか?カレー味の●んこを選ぶような選
挙・・・石川が立候補したのには論外だが、ニトリ
家具の子飼いた張の鈴木を引っ張り出してきたのにも
呆れた。

去年の夏頃から札幌の市長選に対立候補を立てないと
いうのは耳にしていたので知事選もろくな連中を立て
ないと思っていたら・・・案の定。そんなことを思っ
ていた矢先何とアイヌ協会の悪玉で有名な阿部一司の
娘「阿部千里」が、新党大地鈴木宗男の推薦を受けて、
道議選石狩管内(石狩・当別・新篠津・定数2)で立
候補するということで驚いた。

(引用終わり)

たしかに、このなかで鈴木宗男がアイヌ新法をつ

くったことのインタビューをきいていると、歴史を知らないで語っているという印象をうける。

縄文文化、続縄文文化、擦文文化のあとに「アイヌ文化」がでてくるが、13世紀からである。

こうしたアイヌの利権構造をみていると、縄文遺跡は全国にあるのに、なぜ世界遺産の登録が「北海道と東北」なのか、疑問に思えてくる。

*

「放知技」の亀さん 2019/08/17 が十和田湖を紹介している。

(引用開始)

白頭山と言えば、民族派ジャーナリストの山浦義久さんが、白頭山について多様な角度で語っておられたの思い出します。たとえば、以下のような発言…

朝鮮の白頭山を護っているウリ集団。白頭山が噴火した時、石が十和田湖まで飛んだ。その十和田湖から持つ

てきた祠（道祖神）が、今日の白頭山の山頂に飾ってある。白頭山は神聖な御山である。〔中略〕

飯山一郎氏、マヨ氏、亀山は、邪馬台国は遼東半島にあったと主張するが、違う。また、関西でも九州でもない。真の邪馬台国は秋田にあった。秋田と北朝鮮の白頭山は深く繋がっているのである。（栗原茂氏も山浦氏の秋田説に同意）

(引用終わり)

邪馬台国の件は？だが、話のタネに。ちなみに小生は、飯山史観の「邪馬台国は遼東半島にあった」を支持している。

*

秋田刑務所といえば、「犯罪史上未曾有の四度の脱獄を実行した無期刑囚佐久間清太郎」を描いた吉村昭の「破獄」があるが、ここに収監された人に山形県生まれの曹洞宗僧侶の斎藤秀一さいとうしゅういち氏がいる。小林多喜二と同じように特高に逮捕されている。そして、代用教員

中の「ローマ字学習が天皇制すなわち団体を壊すものだとして」有罪になり、服役中に肺結核にかかり、32歳で他界した。

「服役中の秀一が看守の目を盗みながら書きつけた」詩が紹介されている。そして、「秀一が入れられた警察の留置場の壁には、エスペラント語で『非転向』の文字が刻まれていた」という。

城跡の枯れ木の空の夕焼けを 鉄の窓から眺めやる
鉄窓に頬をくつつけて外見れば 自由な蝶々ひらひら

読み終えた本 また手に取って開いてる
白い菊 冷たい空気の中に開いて
とらわれてもはや一年
ラジオの琴に聴き入る監房の日曜

汲みいれられるお汁
少しでも多かれと見詰めている
僅かばかりの陽だまりに

顔照らされる監房の中
夜になって目つむれば
初めて自分だけの世界
思いのだけ空想の翼広がる楽しい世界 (原文ローマ字・小林司訳)

(工藤美知尋著『特高に奪われた青春—エスペラントイヌト斎藤秀一の悲劇—』芙蓉書房出版、2017年、参照)。

*

最後に、「どこへ出しても恥ずかしい」緊縮財政ということ、三橋貴明の『新』経世済民新聞』20180828、藤井聡・京都大学大学院教授より。

(引用開始)

これは、ケルトン来日を契機とする
MMT論争を通して、
「財政拡大がデフレ脱却をもたらす」

「政府は、自国通貨建ての債権では破綻しない」

(引用終わり)

という二つの「事実」「真実」が、かつてより、より広く、より深く世間に浸透したことを意味して
います。

ぐたばれ「国債発行スナ派」(◎池戸万作)。

あとがき

◆連日の猛暑から解放されて漸くウォーキングを再開。それなりの速歩と歩幅を意識しながら歩く。今日はこっちへ行ってみようとか、放し飼いの犬が来るから進路変更などと楽しみながら、約1時間ほどで帰宅。スマホのアプリが経過時間や距離、歩数、消費カロリーなどを記録してくれる。だから？、いや、それだけの話。(B)

◆線状降水帯という現象が、毎年、日本のどこかで起きるようになった。8月下旬には九州北部を襲った。TVに映る被災者の不安そうな顔。いつかここにも来るのかもなあ、地震だってまた。オオッと、今日はタマちゃんの種と肥料を買いに行くんだった。(S)

◆畑と暮らしに関連したもので、ご存知の方も多いと思うが、つばた英子・つばたしゅういち著「ときをためる暮らし」という本を読んだ。この中に「人はだんだん美しくなる」という言葉があった。当方の現実は今全く逆方向だが、心の隅に持っていたい言葉だ。(T)

◆昔、レコードブックなどをながめながら、どういう演奏なんだろうとおもっていたレコードが(とうぜんピンボーで買えない)、いまではたいてい、YouTubeで聴くことができる。何という時代だ！ と、Take Fiveのジョー・モレロのドラムをYouTubeのビデオ(1961)でみながら……。

また1755年のリスボン地震がヴォルテール・ルソー・カントらの哲学に多大な影響をおよぼしたということをした。ウィキペディア参照。(J)

「海市」第17号

2019年9月9日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方